

弱い紐帯に注目したコミュニケーションメディア「わくらわ」

“Wakurawa” Communication media focused on weak ties.

赤塚大典*

概要. わくらわは人々の持つ弱い紐帯に注目した新しいコミュニケーションメディアである。我々の日常では、街で旧友とバツタリ再会し近況報告などを介して思わぬ有益な情報を獲得するといった現象がしばしば観察される。このような現象は、偶然の出会いが人々のつながり（紐帯）の維持と活用のきっかけとなっていることを示していると考えられる。わくらわは、このような偶然の出会いを計算機上で再現することを目的としている。Web ページを場所と見做して、たまたま同じ時間に同じページを閲覧しているユーザ同士が触れ合うきっかけを与えるものである。

1 はじめに

人の繋がりはずしも均一ではない。アドレス帳や SNS に登録した知人のリストを眺めると、緊密に連絡を取り合う友人や知人が登録されている一方で、今ではほとんど連絡を取らなくなって忘れかけている人もいるだろう。時が経つにつれて関係が疎になるのが常ではあるが、一方で何らかのきっかけから、予想もしていなかった嬉しい情報をその知人から獲得することもある。例えば、転職機会の多いアメリカでは、転職に対する有益な情報は日常的に付き合いのある知人（＝強い紐帯）よりも、普段は疎遠な知人（＝弱い紐帯）から得られる場合が多いことが Granovetter の調査によって明らかになっている [1]。これは「弱い紐帯の強さ」として知られている。普段は疎遠な他者から何かのきっかけで思いがけずに有益な情報が得られる可能性があるというものである。

もちろん強い紐帯が弱い紐帯以上に日常生活において重要であることは疑いの余地が無い。しかし、強い紐帯を築くには恒常的にコミュニケーションを取る必要がある。例えば、全ての知人を強い紐帯として維持しようと試みた場合、全ての知人に対して頻繁にメールやチャットをする必要があるだろう。しかし、これを実現するのは時間的にも体力的にも非現実的である。日常的に関わらない知人を弱い紐帯として緩くつながりを維持しておき、必要に応じて活かすことが、時間や体力といったリソースの圧迫を最小限に抑えつつ、社会関係を良好に保つ自然な方法の一つであると言える。

しかしながら従来のコミュニケーションメディアは、日常のコミュニケーション、言い換えれば強い紐帯の構築に重点を置いているようであり、弱い紐帯の維持に注目したコミュニケーションメディアは

まだあまり検討されていない段階といえる。本稿では、弱い紐帯の維持とその活用を目的とした新しいコミュニケーションメディア「わくらわ」を提案する。

2 デザイン指針

本システムでは人々の持つ弱い紐帯を維持しながらも、きっかけが与えられたときにそれを活かすことができる枠組みを目指す。弱い紐帯を維持するにも何らかのコミュニケーションが必須であるが、メールやチャットでのコミュニケーションでは、事前に相手を特定しメッセージを贈るという行為自体がすでに強い紐帯の構築を指向しており、弱い紐帯の維持にはそぐわない。そのため日常生活の中で自然に他者と触れ合うきっかけを持たせることが望ましいと考える。現実社会では、しばしば街で旧友とバツタリ再会する。これを契機に近況報告などを介して思わぬ情報を獲得したり、出会った場所が手がかかりになって自他の共通の興味を知り、新たな関係を形成する場合もある。つまり、偶然の出会いが人々の紐帯の維持と活用のきっかけとなっていることを示していると考えられる。そこで本システムでは、同様の現象を計算機上で再現する。

本システムでは、計算機を使った情報検索や情報閲覧など、日常的に行う作業や行為の副産物として出会いを提供するものであり、出会い自体を目的とするものではない。それゆえ、出会いを意識したくない場合には、行っていた作業に集中できるよう邪魔しないようなデザインにすべきである。また、ユーザが他者を知覚した後コミュニケーションをとるか否かはユーザ自身に委ねられるべきだと考えている。これは、街で見掛けた旧友に声を掛けるか否かがその人自身に委ねられるのと同様である。もしそのユーザがコミュニケーションを取りたいと考えた場合、自然な形でコミュニケーションモードに移行できることが必要であろう。反対にコミュニケーションを取りたくない場合には“努力せずに無視”

Copyright is held by the author(s).

* Daisuke Akatsuka, フリーランスプログラマー

できることが必要であろう。従って本メディアは、ユーザが行っていた作業の大きな妨げにならないように、場合によっては無視できるものであるべきだと考える。同時に、コミュニケーションを取りたいと考えた場合には簡便な行為でシームレスにコミュニケーションモードに移行できるべきであると考え、

3 実装



図 1. 同じ時間に同じページを見ているユーザたち

本実装ではユーザの日常的行為の一つとして Web 閲覧を取り上げる。Web ページを場所と見做し、たまたま同じ時間に同じページを閲覧しているユーザ同士が触れ合うきっかけを与える。ユーザはコミュニケーションを意識することなく、副次的に他者と触れ合うきっかけを得る。

ユーザインタフェースでは、同じページにいる他者の存在をアイコンで提示する。前節で述べたデザイン指針に基づき、極力、ページの閲覧を阻害しないように、ステータスバーなどの比較的小さな領域に配置する(図 1)。また、ちょっと前まで同じページを訪れていたことを示す「残り香」機能を持ち、時間差によって透明度を変化させる。

他者の発見後、どのような行動を取るかはユーザ自身に委ねられる。必要であれば、他者の詳細が記載されているページ (mixi 内プロフィール) を閲覧することができ、そこからメッセージを送信することもできる。但しこの機能は、既に知人であるか、あるいはそのユーザが許可していないと閲覧することができないようにしてある。これは、mixi における人間関係をアンケートした結果に「知らない人から友人登録のリクエストが来たのだが、断ると悪いので登録した」というような不快感を持った例がいくつかあったことを考慮したものである [2]。また、メッセージによるコミュニケーションとは別に「わざわざ言葉にする程のことでもないけど、何かしら伝えたい」といった軽いコミュニケーションを実現する「つんつく」機能を併せ持つ。つんつく行為が

相手に伝わることで、挨拶的な効果を狙ったものである。メッセージでのコミュニケーションと比べ時間を節約できる。相手アイコンをダブルクリックでつんつくと、相手側ではつんついたユーザのアイコンがピョンピョン跳ね、自分がつんつかれたことを提示する。

システム構成は、わくらわクライアント、わくらわサーバ、つながり DB で構成される。わくらわクライアントはユーザインタフェースを担い、ユーザへの情報提示とユーザからの入力を受け付ける。わくらわサーバは、各ユーザが何処にいるのか、それによって誰と出会うかなどを管理している。ユーザの所在は URL をクライアント上でハッシュ化して取り扱うことで、わくらわサーバ管理者にとってユーザが具体的に何処を見ているかわからない仕組みになっている。つながり DB は、プロフィールや誰と誰が知人関係であるかなどの SNS 情報を保持しており、アイコンやニックネーム、知人と他人の違いに応じた情報開示などをするために使われる。

現在、バージョン 0.13 (2006/10/16 現在) を公開中である [3]。サポートしているブラウザは今のところ Firefox であるが、IE のサポートも行う予定である。また、つながり DB には mixi を利用しており、本システムを利用するには mixi の ID が必要になる。

4 おわりに

「わくらわ」は弱い紐帯の維持と活用を目的とした新しいコミュニケーションメディアである。日常的に関わらない知人を弱い紐帯として緩くつながりを維持しておき、必要に応じて活かすことで、リソースの圧迫を最小限に抑えつつ、良好な社会関係を保つことができると考えている。

謝辞

本プロジェクトは、情報処理推進機構 IPA の未踏ソフトウェア創造事業 (2006 年度前期 河野 PM) のご支援を受けています。また、貴重なご意見や様々な理論をご教示頂きました、NTT コミュニケーション科学基礎研究所の松下光範氏、松田昌史氏に感謝いたします。

参考文献

- [1] M. Granovetter: "Getting a Job: A study of Contacts and Careers", Harvard University Press, Cambridge (1974). 渡辺 (訳) 「転職」。
- [2] 松村 真宏: mixi における男女別・年代別の利用者意識の抽出, 第 22 回ことば工学研究会, pp. 71-81 (2006).
- [3] わくらわホームページ
<http://www.wakurawa.com/>